

博物館 Dictionary No.221

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館1F-1(彫刻)に展示されている作品について勉強してみよう。

仏像はどうやって直すの? 彫刻作品の修理

江戸時代までにつくられた日本の彫刻作品は、仏さまの姿をあらわしたものがほとんどでした。それは、祈りをささげるためのものです。ときには人の姿をかたどった「肖像」もつくられましたが、それらも聖徳太子などの仏教ゆかりの人々が大半をしめています。これらはすべて、ひろい意味で「仏像」とよばれています。

では、仏像は何からつくられているのでしょうか？

じつは飛鳥時代から奈良時代にかけては、法隆寺のお釈迦さまや東大寺の大仏など、銅をつかってつくられた像が多くみられました。また、奈良時代には土をかためてつくられた仏像もあります。土からつくられた仏像なんて、とおどろいた人がいるかもしれません。しかし東大寺戒壇堂の四天王などのように、国宝となった土の仏像もあるんですよ。

しかし平安時代になると、木からつくられたものが圧倒的に多くなります。といっても木だったら何でもよいというわけではなく、「カヤ」や「ヒノキ」などの香りのよい木材をつかってつくられています。これらの木はゆがみも少なく、適当なかたさも持っています。ちなみに、今でもカヤは高級な将棋盤などに用いられています。

その木材をつかった仏像ですが、平安時代の前半には「一木造」といって、一本の木から仏像全体をまるまる彫っていました。ところが平安時代も後半にはいると、次第にいくつかの木材を集めてつくられるようになります。複数の部品をつないでつくるプラモデルを、ちょっと想像してみてください。これを「寄木造」といいます。

寄木造では「釘」や「かすがい」をつかって木と木をとめたり、「ニカワ」という動物の皮か



図1 重要文化財 釈迦如来立像
鎌倉時代・13世紀 国(文化庁)蔵

らつくられた^{せつちやくざい}接着剤で^{せつこう}接合しています。また「うるし」という木の^{じゅえき}樹液を表面にぬって、金をたたいてうすくのばした「^{きんぱく}金箔」を^は張りつけたりしています。

上手に使えば、木もうるしも強い^{そざい}素材なのですが、長い年月の中ではどうしてもいたんできます。また、ニカワの^{せつちやくりよく}接着力は50年ほどでなくなってしまうことが多いのです。したがってそのようなものをつかってつくられている^{ちようこく}彫刻作品は、50年から100年ほどで小さな^{しゅうり}修理をくりかえし、2～300年に1度は大きな修理をする必要があります。

では、具体的な^{しゅうり}修理方法を、今回^{てんじ}展示している^{ぶつぞう}仏像からみてみましょう。

^{ぶん かちよう}文化庁の^{しゃ かによらいりゆうぞう}釈迦如来立像（図1）は、10世紀の終わりころに^{ちやうねん}奄然という偉い^{えら}お坊さんが^{せいりゆうじ}中国から持ち帰った^{ぞう}京都・^{かまくら}清凉寺の像を、^{せつちやく}鎌倉時代にさらに写したものです。



図2 重要文化財 宝誌和尚立像
平安時代・11世紀 京都・西往寺蔵

このような^{しゅうり}修理を何度もくりかえすことで何百年もの時をこえて、^{ぶつぞう}仏像というのは現代にまで伝えられてきたのですね。

この^{ぞう}像では、木と木の^{せつちやく}接着部分がいたんでいたので、その部分でいったん取り外してからふたたび^{せつちやく}接着するという、おおがかりな^{しゅうり}修理がほどこされました。そのさい、^{ぞう}像のなかにおさめられた^{もんじょ}文書なども取り出されました。^{しゅうり}修理すると、このような^{だれ}発見があり、^{ぶつぞう}誰がどのような理由で^{ぶつぞう}仏像をつくったのか、わかる場合もあります。

^{さいおうじ}西往寺の^{ほうし}宝誌和尚立像（図2）は、今から1500年以上前に^{かつやく}活躍した中国の伝説的な^{ぼう}お坊さんです。よくみるとお坊さんの顔がまんなかから^わ割れていて、その下に^{かんのん}観音さまの顔がみえています。これはお坊さんの正体がじつは^{かん}観音さまだ、ということを示しているのです。

このお像では虫くいがひどく、へたにさわるとぼろぼろはがれ落ちるおそれがありました。そこで、^{ぶん かざい}文化財に使ってもよい^{そざい}素材の^{じゆし}樹脂（プラスチックの一種）を表面にぬって、これ以上表面がはがれ落ちないように強化しました。

このほか、^{ほうおんじ}報恩寺の^{しゃ かによらい}釈迦如来および^{しよせんぶつがん}諸尊^{ぶつぞう}仏龕のように表面の^{よご}カビや^{じよきよ}汚れを除去したり、^{あんしやう}安祥寺の^{ごちによらい}五智如来坐像のように^{さいしき}彩色や^{しっぽく}漆箔の^{はくらく}剥落止めをおこなったりして、^{ぶつぞう}仏像がつくられたときの^{じやうたい}状態を、なるべく取りもどすようにもつとめます。またときには、^{はんにやじ}般若寺の^{やくしによらい}薬師如来坐像のように、^{ぶつぞう}失われてしまった手の部分をあらたにつくる場合などもあります。

（美術室 ^{あさぬま}浅湫 ^{たけし}毅）